

## 東史郎さんを偲んで

### —日本人自身による日本の戦争責任の追及—

山内小夜子

東史郎さんの南京裁判を支える会 事務局長

東史郎さんを偲ぶ会 2006年3月4日(土)、京都テルサ

みなさんこんにちは。私が初めて東史郎さんにお会いしたのは、1988年です。

私は、東本願寺の教学研究所の研究員をしています。最初に南京に行った動機は、戦争中、日本の仏教教団が中国や朝鮮でどういう開教や布教活動をしていたのかという調査が目的でした。戦争中、アジア太平洋地域に260箇所ぐらいの真宗大谷派関係の別院や寺院等の施設がありました。研究所で、宗門の近代史の検証として『真宗と国家』という資料集編集を担当していました。当時の南京布教所や、上海別院が今どうなっているのか、『資料集』の内容を充実させたいという「不純」な動機をもって南京に行ったのが1988年です。

上海、蘇州、南京を訪問して、中国の大地に残されている日本の宗教施設跡の調査をしたのですが、その時に、南京記念館にもお伺いして、南京大虐殺の実相を学んだわけです。

記念館の中でさまざまな写真や資料を見まして、本当に胸が塞がるような思いをしました。私自身、戦後の歴史教育の中で、十分に学んでなかったことばかりが展示されてお

りました。南京の記念館で、案内をしてくれた通訳の女性、常婦さんという方ですが、同世代の女性でした。

私は、この南京の地で起こったことを何も知らなかった。常さんとは国は違うけれども、同じ時代を生きている。私は、この人と友達になることができるのかなあと、率直に思いました。

その前年1987年12月に東さんは、戦後に初めて南京を訪問されていたのです。私は翌88年の夏に南京に行きました。中国の紫金山の麓に、東郊葬送地というところがあって、山の麓で亡くなられた3万人余りの方々を追悼するた記念碑があります。そこにフィールドワークに寄せてもらいました。その時に、段月萍副館長が同行して案内してくださいました。そして、こういうお話しをされたんですね。

「昨年12月の南京大虐殺50ヵ年の年に、東史郎という元日本兵が南京を訪れ、南京人に謝罪しました。ここ東郊葬送地にも来て、この地域一帯で亡くなられた三万人以上の受難者に追悼と謝罪をしました。私たちは、こ

の東史郎さんの勇気に敬意を表します。日本で証言することの困難さを私たちは知っています。」

この言葉を聞いたときに、今まで自分自身体験しなかったような複雑な感情が胸の中にかみ上げてきて、涙もこみ上げてきたのです。侵略戦争の中で、中国の人たちを殺し・殺される関係を生きた一人の日本人、その人が50年後に、そのことを自省し、認め、証言し、謝罪をした、その勇気に敬意を表すといわれる中国の方の魂にふれたような思いがしたのです。

私が、一番最初に東史郎さんという方と出会ったのは南京の東郊葬送地で、段月萍副館長さんが会わせてくれました。1987年、東さんや増田六助さん、上羽武一郎さんたちが加害の証言をされたのは、京都では新聞報道がたくさん出ていたようなんですけど、詳しくは知りませんでした。

その後日本に帰ってきて、すぐ連絡させてもらいましたが、その後お会いする機会がなかったのです。お手紙の往復くらいだったんです。

1990年でしたか、今東京都の知事の石原慎太郎さんが、「日本人が南京で大虐殺を行ったといわれるが、事実ではない。中国人が作り上げたお話であり、うそだ」（『プレイボーイ』1990年10月号）という発言をしました。

それを聞いたときに、私はこれはちょっと黙っていられないと思ったんですね。「南京大虐殺はウソ」でも許されないのに、「中国人がでっちあげた」と、二重の侮辱をした。この発言は、私が南京で学んできたことと違

うと思ひまして、「石原発言を許さない京都市民集会」を計画して、東史郎さんと、もう一人舟橋照吉さんをお呼びして、実際に南京戦を体験された方の証言をお聴きしようという集会をしました。

その集会の時、面と向かって初めて東史郎さんとお会いしたのです。京都の部落解放センターの研修室をお借りして集会を開きました。集会の前に、簡単な打ち合わせをしました。すぐ隣にある「陽」という喫茶店でした。私は東さんに、「私のおじいさんも南京攻略戦に参加しています。私のおじいさんは善通寺の部隊でした。愛媛県の松山港から出港しています。そのことを小さな日記に残しています」と、そういう自己紹介をしました。そうすると東さんは「そうか、君のお祖父さんも南京に行ってたんか。善通寺の部隊なら、隣同士やな。三十六歳で後備役やったら、悪いことはしてへんで。本当に悪いことをしたのは、私らのような現役兵。君のお祖父さんは、悪いことしてへんで」と言われたのです。「悪いことしてへん」というのは、孫の世代の私への心遣いだと思います。そういう出会いで、それから長いおつきあいになるんです。

その「石原発言を許さない市民集会」の2年後に、東史郎さんの裁判が始まります。

この裁判が始まったときは、「山内君、裁判にかけられた」と連絡をもらいました。東京地裁での裁判でしたので「東京は遠くて通うのが大変ですね」というお話しをしたことを覚えています。しかし、その時は、どう考えても東さんが敗訴になるはずがないと思っていたんですね。

裁判の原告の方は橋本さんという方ですが、『わが南京プラトーン』の中で「西本」と仮名にされています。東さんは、1987年の証言の後、非難や誹謗中傷が続いたので、出版に際して、戦友に迷惑をかけてはならないと仮名にされていました。名誉毀損の裁判でしたが、仮名で名誉毀損になるのかと。東さんが敗訴になるようなことはない、非常に軽く考えていました。

ところが東京地裁一審で東さんの敗訴になった。これはとつても大変なことが、今、私たちの社会の中で起こっているのではないかと思います。そして、その後、大阪の弁護士3名と新しい訴訟団を組織して、東さんの第二審裁判が始まっていくんです。

「東史郎さんの南京裁判を支える会」という会の名前ですが、本当に支えられたのは、むしろ私たちの側だと思っています。



私たちは、東さんに寄り添うことしかできませんでした。日本海側の丹後半島の突端の<sup>なご</sup>間人から京都まで、電車で約3、4時間。京都で、新幹線に乗り換えて、東京まで3時間半。ある時は夜行電車に乗って、朝の法廷に間に合うように東京に通われました。

だいたい3ヶ月に1回、東京に裁判に通う。それも80歳のおじいさんが一人で東京の法廷に向かわれている。せめて裁判所までの道中を一人じゃなくて、何人かでサポートしようということが、一審の時から始まっていて、そもそもの「支える会」の始まりです。

東さんの裁判報告集として『加害と赦し—南京大虐殺と東史郎裁判』（現代書館）を発行し、日本と中国の双方から、東さんの証言と謝罪、裁判の意義を論じていただいております。是非読んでいただきたいと思います。

今日私は、この本に収録されていない、東さんと中国の方々との関わりを少しご報告したいと思っています。

東さんが1月3日に亡くなられた後に、中国山東省棗荘市の小さな村のある中学校、中国山東省農業学校を退官された任世滄さんという方から、お悔やみのお手紙が届きました。任さんからは、裁判闘争の最中にも、声援の手紙をいただいています。

任さんの住んでいる地域、棗荘という村は東さんが南京攻略戦の後、徐州戦に向かう途中に通った戦場です。

とりわけ東さんの親友だった樋口さんが、友軍の誤射により命を落し、そこで火葬にされた地域です。この『東史郎日記』第4巻の部分に、ちょうど任世滄さんが住んでいる山

東省棗荘市で起こった戦争の戦場を克明に書かれています。

任世淦さんは、中学の教員を退官された後、ご自身の地域の戦争の歴史の掘り起こしをされていたわけです。その過程で、東さんの日記が中国語に訳されます。そして、任さんがその「東日記」を読んだ時、まさに自分の村の戦争が、東さんの日記に克明に記されていることがわかるわけです。任さんは、中国語の『東史郎日記』を10冊買って、自分の友達に配るのです。そして、戦争体験者の聞き取り調査を始めるのです。そして出来上がったのがこの『關於「東史郎日記」337頁～192頁 調査考証』です。村を歩いて、おじいさん、おばあさんのお話を聴いて、東さんの日記と照らし合わせ調査した調査考証です。これを読みますと、東さんの部隊が村に入ってすぐ、喉が渴いたので喉を潤した泉がある、その泉の写真があります。東史郎が喉を潤した泉とか、戦友を火葬する時に、薪をとるために壊した家屋とか、そういう調査をされ、東さんの日記を通して、東さんの日記を基に、自分たちの村々の記録に残らなかった歴史の掘り起こしをされていかれたわけです。

その方からのお手紙を、読み上げたいと思います。

「尊敬する東史郎さん、

60年前、あなたはあなたの連隊に従って、徐州戦場に出発する命令を受け取り、私たちのエキ城の西南山区に参戦しました。そのとき、私はまだ物事を何も覚えていない嬰兒にすぎませんでした。母親から、ある時日本軍が「掃討」にやってきて、私を懐に抱いてあ

わたくしに逃げ出し、土壇場で荒れ果てた墓に隠れてやっと生きて帰ることができたと母親が言うのを聞きました。

60年後の今日、私はすでに歳老いて退職しています。教壇から離れて以後、私は自転車に乗って、月日のトンネルを通り抜け、あのほろろ過ぎ去った恐ろしい瞬間の後を訪ねようと一途に思い続けてきました。

三年前、私はこの千あまりの村を歩き回り、多くの、今なお生きておられる老人、とりわけ、あの被害に遭ってなくなった同胞の遺族から、日本軍第5、10師団があの内外に知られた台児荘大戦の中で大敗を被り、私たちの故郷の何の罪のない一般住民に対して、気の狂ったように報復し、この世のものとは思われないほどむごたらしく血なまぐさい大虐殺をおこなった確証を得ることができました。現在私は、既に収集し整理した大量の資料を持っていますが、必要であればその一部をあなたに送ってお見せすることができます。

昨年、私は、幸運にもあなたのあの永い間封印されてきた日記を読みました。これが私の調査活動の「苦旅」に更に原動力を加えてくれたことは間違いありません。私が驚ろいたことは、日記の中のなんと50数ページにわたって、あなたは私の故郷での軍事体験を記述していることでした。あなたが自ら描いた軍事地図が示す山村の王荘、田村、黄山湖、西匡譚などは、皆私がよく知っている村名です。驚きのあまり、私は直ちに節約して貯めていたお金を取り出して、一度に10冊を買い求め親友に贈りました。

それだけではなく、私はまた、地図を見な

がら訪ね調べ、あなたが記した多くの物事について、一つづつ裏付けをとりました。慎重を期して、私は馬山套や辛荘村を何度も訪ねました。その結果はどうでしたでしょう。あなたが二度大いに喉をうるおした「清泉」、腹這いになって伏せていた「石陣」、日本の国旗を振った「山の斜面」、さらには滝口光夫が誤殺された所、一つひとつの死体を焼いた地点、ひいては田中が他の兵士たちと一緒に井戸の周りを取り囲んで、水を汲み、飲んでいたとき銃撃をうけ、もう少しで撃ち殺されそうになった場所、それは高い土台の上の井戸ですが、それらをすべて調べて確かめはつきりさせました。その他に、あなたが聞いた30匹の軍馬の戦死、あなたが目撃したエキ城近郊で、私たち中国側に撃墜された飛行機、私はみな少しばかり知っています。従って、私は「東史郎日記」のすべての内容の真実性を固く信じて疑いません。

被害を受けた側に立てば、主観・客観上の原因から、あなたはあの当時、日本軍の数々の残虐行為に対して十分に明らかにできず、またそれは不可能であったことを指摘せざるをえません。それにもかかわらず、やはり、何かを企むことがあって、ある細かな一部を捉えて残虐行為の事実を否定する者がいて、良心に背いてまでもあなたを告訴しました。南京の裁判所の前で発生した出来事を見て、ひどく心が痛み憤激を感じる以外にはその事件の真実性についてはほんの少しの疑いを持ちません。なぜなら、私の故郷には、このような残酷な場面、場面を見聞することが本当に多かったからです。」という手紙でした。



さらに、東さんの日記の中で、たった一行だけ出てくる中国の若者がいます。日記には、

「年若い支那人が一人いた。使役に使おうと思ったが、何を聞いてもプトンデー、プトンデーと返答して腹立たしい。首をはねてやろうかと思う。手足をひっこくって小屋の中に放り込む。明朝出発の時は地獄へ送ってやるんだ。」（『東史郎日記』342頁、プトンデー：わからない）と記述されています。

一人の中国人を荷物を運ばせようと捕まえた。次の朝、東さんの日記によれば、「地獄へ送ってやるんだ。」と、たった一行記録されていたその若者。その人の遺族の方がいらっしやったことがわかったんです。その遺族の方、孫延信さんというおじいさんですけど、自分の兄がいつ、どこで、どのように亡くなったのか、わからなかったんです。しかし、その時期、その地域で亡くなったのは、孫延信さんのお兄さんだけなのです。そして、その時期、その地域を通ったのは東さんの部隊



だけなんです。

東さんの日記でたった一行に記録された記述、荷物を運ぶために捕まえた一人の中国人を次ぎの朝、彼は地獄に送ってやろう、という記述から、孫さんのお兄さんが亡くなられた場所と原因がわかったわけなんです。

そういう経験をされた方が、東さんが南京裁判を闘っておられる事に対し、自分の兄を殺した東さん、その東さんが南京裁判を闘っている。私たちはあなたを赦します、あなたは中国人民の友人です、声援を送りますというお手紙と写真を任さんが、私たちのところに届けてくださいました。

任さんの手紙の最後には、

「東史郎さん、あなたはまさに中日の友好関係をさらに発展させるために歴史的な貢献をされてきました。歴史は必ず最も公平な審判を下すにちがいません。私たちは、あなたを断固として支持し、あなたに対して声援を送ります。資料や写真の資料を見ても明らかのように、このように多くの難に殉じた同胞の遺族たちも、「徳をもって、怨みに報い」、みな貴方の側に立つことを表明しています。ご返事を心待ちにして、貴方の幸福と平安をお祈りします。」と書かれています。

この報告書は、後の机に置いておきますのでご覧ください。

「東史郎日記の337から392ページに関する調査考証」は、村々を調査して写真を撮り証言を記録しています。これを裁判で、東日記の真实性を証明する証拠に使ってくださいということを送ってきてくださいました。

お手元のパンフレットのはじめの方に、東隆史さん（息子さん）の書かれた文章があります。そこに、父は本当は外交官になりたかった。しかし、残された母親と家業を継いで生活を守るために、外交官の夢をあきらめたと書かれています。私は、東さんは中国の民衆のお一人ひとりと繋がる、大きな友好の架け橋だったと思います。本当に大きな友好のための外交をされた方ではないのかなと改めて思います。

それからもう一つ報告いたします。東さんが、一番最後にされていた仕事は、『昭和天皇の独白録』批判です。

1990年『文藝春秋』12月号に掲載された『昭和天皇独白録』は、1946年4月頃に昭和天皇が語った言葉を、側近の寺崎英成が書き残した日記で、アメリカに在住する寺崎氏の娘が保管していました。1946年4月28日にはA級戦犯東条英機ら28名が起訴された、その時期に語られた天皇の言葉であり、天皇の無罪論を補強するためのものと考えられています。

東さんは、1992年に地元の『丹波文庫』という同人誌に「昭和天皇独白録批判 昭和天皇独白録逐次検証 東条英機批判」という文章をまとめられています。

これは東さんがご自身体験された戦争、その戦争は一体誰が起こし、誰が多くの若者を戦場に送ったのか、その責任はどこにあるのかという追求の書です。「戦争だからしかたがない」ということではなく、どうして戦争が起こった、その責任はどこにあるのか、東さんは最後まで問い続けておられたことがわ

かります。

本当に力を尽くして『昭和天皇の独白録』批判総括を書かれています。最後まで手をいれていた原稿を、身内の方に託されています。同封された手紙には、「私は、ただ今92才。日中戦争開始とともに戦場に招集され参戦した者です。多くの戦場体験をしました。南京占領は12月12日、夜11時でありました。わずか37名の四方城夜襲突撃、夜11時に占領したのであります。四方城の占領が南京の占領でした。一個小隊、小隊員60名の半数近く激減する無惨な戦闘の思い出は私の人生から消え去りません。故に、『東史郎日記』を熊本から出版しました。」とあります。

お手元のパンフレットの1頁を見て下さい。1987年に初めて南京体験を証言をされた、その後に書かれた文章です。その時は、東さんを始め3名の方々が一人称で南京戦を証言されました。その後、「なぜ私は南京大虐殺を証言したのか」という文書を書かれました。これはたくさんの誹謗中傷、嫌がらせ、非難、いたずら電話があつて、それを一人一人お返事されていたのですが、ほとんどが匿名で、書いた返事も戻ってくるという状態でした。それで、「なぜ自分は南京戦を証言したのか」という理由を理解してもらいたいと、朝日新聞の手紙の欄に投書し掲載されたものがこの文章です。

そこに「私たちは自虐的に日本軍の不正、悪事、虐殺を暴露するために記者会見に臨んだものでは断じてない。悪は誰が起こしたのか、責められるべき者は誰なのか。悪の原動力を探求し、反省し、再び過ちなからんことを願ってこそ、日中友好の基ではないか…

と思い、記者会見をした。非難、攻撃する匿名氏は『英霊を冒瀆するものである』、『戦死者を犬死にするものである』と言う。果たしてそうであろうか。諸氏の戦死された父や兄弟は何を希求しているのであろう。再び肉親を戦場に駆り出さない誓いをたててくれ、と願っているのではないか。形式的に九段(靖国神社)に参拝するよりも、不戦の誓いの靖国神社は、各人の胸のうちに祀られ、祈られるべきではないのか。そうでなければ、敗戦の無意味な犠牲者に過ぎず、それこそ犬死として終わるのではないか。」と、書かれています。

「悪は誰が起こしたのか、責められるべき者は誰なのか。悪の原動力を探求し、反省し、再び過ちなからんことを願ってこそ、日中友好の基ではないか」とあるように、一体なぜ、こういう戦争が起きたのか、一体なぜ自分たちが兵士として中国人を殺し、殺される、そういう関係を生きざるを得なかったのか。そのことを最後の最後まで、追求し続けられた。そして、そのことをきちっと考えていくことの大切さを身をもって示されたと思います。

遺された「昭和天皇独白録総括批判」の表紙には、力強い字で、「日本では日本人自身による戦争裁判は行われなかった。戦争責任の追及はなかった。敗戦責任は不問にされた。この批判は私の戦争責任追及である」と書かれています。この言葉こそ、東史郎さんが、私に残してくださった遺言だと思います。

「日本人自身による日本の戦争責任の追及」、この大きな課題を、東史郎さんから受け継ぎ、未来の人たちと共有したいと思います。

東史郎さんとお会いできて、裁判闘争がありましたので、多くの時間が戦争や裁判の話が多かったんですけども、東さんはそれだけでない、幅の広い、とてもすてきな男性だったと思います。

私たちは、東さんの二中時代のお話を聴くのがとっても好きでした。二中時代に授業をさぼって嵐山に遊びに行った話をよくされていきました。授業をさぼってお友達と嵐山の方に行って、そこで修学旅行に来ている九州の女の子をナンパしたという話なんです。淡い初恋のお話です。その後その女性と文通をするのですね。その当時の学生さんは和歌をつくって、送りあったりしている。

「東路の 行末遠き淋しさよ 春の心を月ぞ知るらん」

という歌を贈られたりしています。その方は九州の方で、名前は「はる」さんです。「春の心」とか、京都は九州の東で、「東路の」という言葉で、東さんの名前と掛けている歌なんです。そういう話をお聞きしたり、温泉

が好きだったので、久美浜温泉に行ったり、間人カニを食べに行ったりしました。また、文学青年だったので、その当時の本を見せていただいたりしました。とても豊かな人生経験をされていて、その薫陶をいただきました。

『東日記』の表紙の写真は苦悩の顔の写真です。これは1997年に南京60周年記念集會に参加された時の写真です。こういう悲しい、苦悩の顔、裁判闘争の中ではこういう苦悩の顔のほうが多かったですけど、日頃は、笑顔のほうが多かったのではないかと改めて思います。

私たちは、東さんの生涯の課題にされたこと、また東さんの残してくださった日記を伝える活動を続けていきたいと思っています。

東さんの日記を一人でも多くの方に伝えたい。私たちの次の世代の人に戦場の実相というものをお伝えしたいと思っています。まとまりませんでしたけれどもこれで報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。